蕪村俳諧私解（承前）：「牡丹散て」の巻

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石川, 真弘 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4646

蕪村俳諧私解（承前）

―「牡丹散て」の巻―

石川真弘

はじめに

蕪村が編み、廻文の趣向よって書名を付した俳書『もゝすもゝ』は、蕪村晩年の円熟した俳境を示し、趣向の巧みさを窺わせる作品集として注目される。収録する蕪村・几董の両吟歌仙二巻は、安永九年（一七八〇）の晩春から初冬に掛け、師弟の手紙の交換により推敲を重ね、完成させた作品である。その折蕪村が几董に宛てた作品の製作に関わる書簡が幸い多く残されており、作品推敲の様子を窺うことができる。また几董は、自著『附合てびき蔓』の中に、『もゝすもゝ』所収の作品の自解を記しており、それらの資料は、本書作品の解読に当たり頗る参考になる。だがそうした作者自身の解があるにも拘らず、従来その解を無視した解釈が広く行なわれている。よって蕪村書簡及び几董の句解に従い、所収作品の一巻「牡丹散て」の歌仙について私解を試みることにする。

「牡丹散て」の巻

発句　牡丹散て打かさなりぬ二三片　　蕪村

季語は、「牡丹」で夏である。牡丹は、周茂叔によって「愛蓮説」に「李唐よりこのかた世人甚だ牡丹を愛す、（中略）牡丹は花の富貴なる者也。」と記され、以来多くの文人に好まれてきた。蕪村もその一人である。数日楽しんできた牡丹の花が、いよいよ散り初め、その二三片の花びらが、地面に散り重なった。牡丹の花は、花びらを幾重にも重ねて華麗豪華に咲き、その姿が世人を富貴な思いに誘う。今その牡丹が、散ってもなお二三片の花びらを重ねてその華麗な姿を保とうとしているというのである。咲いている牡丹を詠むのが普通であるのに対して、この句が散った牡丹を詠んでいるところに新味があるというのではない。また散りゆく牡丹の移ろいに視点を置いた作と言うのでもない。花びらを重ねて華麗豪華に咲く牡丹

の美の実相に注目し、散ってもなお花びらを重ねて牡丹の華麗な姿を保とうとする様子を捉え、「打かさなりぬ二三片」と描写したのである。その点について几董は、「発句は牡丹の優美なるを体として、やゝうつろひたる花の二ひら三ひら落散しを、打重りぬとしたが作也。二三片とかたう文字を遣ふたは、題の牡丹に取あはせし趣向也。」(『付合てびき蔓』)と説明している。

牡丹散て打かさなりぬ二三片

脇　卯月廿日のあり明の影　　几董

季語は、「卯月」で夏である。前句に詠まれた牡丹の時節、その牡丹の花が最も美しく見える時間帯を見定めた付けである。牡丹の季節は卯月、散るのはその月の後半とすれば二十日時分である。散った花びらには朝露が下り、夜明け前の月の光を露に宿して、花びらが一層美しく見える。前句の散ってもなお美しさを保とうとする牡丹のけなげなさに、その牡丹が最も美しく見える時分を打ち添えた付けである。几董も「ワキは、その時節を定めて、卯月の廿日としたが、発句の見込にして、有明の影と又時分を定めて、散た牡丹のうへに露などもきら〳〵として、有明月の影のうるはしう、よい天気のさまが見えるよな。是を牡丹に廿日草といふ異名があるによつて、廿日とさだめたると見ば、此ワキ大キに句位を減ずる事じやぞ。」(『付合てびき蔓』)と自解している。蕪村は、几董へ「右之ワキ甚よろしく、第三御案じ成さる可く候。さのみ骨を折らずして、いさぎよきワキ体にて、愚句も又花いばらよりはさらりとして、ぽたんのかた然る可く候。」(安永九年七月二十五日付)と脇句を称揚した書簡を送っている。因に「花いばら」の句は、「花茨故郷の路に似たるかな」である。

卯月廿日のあり明の影

第三　すはぶきて翁や門をひらくらむ　　村

雑。「すはぶきて」は、咳払、しはぶきと同意だが、古雅な言い回しで翁の人柄に相応しい表現である。翁を門守りと見る。「らん」はその姿が定かでないことを言い、前句の夜明けの頃の薄暗さに応じる。辺りはまだ暗くその姿が定かでないが、咳払の声で翁と察せられたのである。前句の和歌的優美な古体めいた表現に呼応して、古物語の一場面を創作する。四月二十日のまだすっかりとは夜が明け切らない空に、有り明けの月が残る時分、門守りの翁が起きて来たらしく咳払の声が聞こえ、暫くすると翁が朝の門を開く「ギギー」という音が聞こえて来た。蕪村は、几董へ「夏の巻表、とかく心にかゝり候。翁のすはぶき、此句は少し述懐めき候へども、くるしからず候。」(安永九年筆)と書き送っている。初折表には述懐の句を嫌うのが通例だが、此の句は少し述懐めいたものの問題なかろうの意である。

すはぶきて翁や門をひらくらむ

初オ四　聟のえらびに来つるへんぐゑ　　村

雑。「へんぐゑ」は変化、妖怪のこと。前句の重々しく何か起こりそうな気配を受け、魔性の女の聟選び譚を趣向する。門は、いつも閉ざされたままの開かずの門であろう。その門構えの屋敷には、今は落魄の身と成った若い男とその男を世話する翁の二人が暮らし

ている。その殿子は怪しげな病的とも思える美男子であり、魔性の女がその男に魅せられた体である。夜も更けた頃、お屋敷の門の戸を叩きながら「御免下さいまし。御免下さいまし。」という怪しげな若い女の声がする。変化が、美しい娘子に姿を変え、男を婿に迎えんと訪ねてきたのである。暫くすると翁が起きて来たらしく、咳払の声と共に「ギギー」という門を開く音が聞こえてきた。怪異物語は、蕪村の好むところで、いわば『雨月物語』的世界である。

婿のえらびに来つるへんげゑ

初オ五　年ふりし街の榎斧入て

雑。月の定座だが、既に脇に月を詠んでおり、ここに出さない。「年ふりし」は、老木を意味し、前句の「へんげゑ」を榎の老木の精と趣向する。「街の榎」は、一里塚などとして人々に親しまれた木であろう。榎の根本には祠などがあり、霊樹老木として幹には注連が廻らされてあったと見る。「街」はその界隈の意で、かねがね近在では噂になっていた霊が宿る榎であったのであろう。夜な夜なその榎から変化が現われ、婿選びのためであろう、若い男のいる家を訪れる。訪ねられた男の身の上には、次々と良くない事が起き、街の人々は遂にその榎を切り倒してしまったと言うのである。打越の婿選び譚の視点を変え、巷の怪奇譚を創作する。初案は、「口またのさひ浅ましく年ふりて」であったが、蕪村の「此句、あさましき、と云ことばに、年ふりて、とつゞき候故、懐旧のやうに相成り候。」(安永九年筆書簡)と云う理由によって自ら「年ふりし街の榎」と改作している。

年ふりし街の榎斧入て

董

初オ六　百里の陸地とまりさだめず

雑。一般に前句を旅の途中の属目と見て、その景を眺める旅人の感慨を付けたという解が行なわれているが、そう解したのでは連句として変化に乏しく、短調の気味を免れない。むしろ「斧入て」その結果「百里の陸地」を辿ることになった、と解する方が文脈の流れとして妥当であり、物語的世界を展開させた付けと見たい。祟りがあるとも知らず、迂闊にも榎の老木に斧を入れて切り倒してしまった。そのため祟りの気配が現われ、祟りを恐れて落髪僧体となり、墨染の衣に身を包んであてどなき修行の旅に出ることになった。「とまりさだめず」は、前句に添って旅の状況の単なる説明でなく、これから先あてどなく恐怖心が続く不安な心境を窺わせる。漂白流離の思いを示す付句は、百里・陸地と漢語を重ねて占雅な詩趣、格調を漂わせ、仏教説話発心譚の一齣を形成する。蕪村は、第三「すはぶきて」の句解の折の既出書簡に「百里の陸地とまりさびしき此句、旅魂客愁の光景、姿情のがれがたくて述懐めき候。老の寝ざめなどの類、述懐候故、翁のすはぶきもいやなものに候、しかれども随分くるしからず候ゆへ、第三は其侭にて差し置く可く候。」と認めており、初案の下七「とまりわびしき」を改作したことが分かる。

百里の陸地とまりさだめず

初ウ一　哥枕瘧(ワラハ)落たるきのふけふ

雑。前句の百里の旅を歌枕探訪の旅と見定め、西行の如き歌人を想定する。即ち、仏道修行のために漂白する人物を歌人に変える。

前句の「とまりさだめず」から漂白に身を置く歌人を想い、「歌枕」を発想したのである。ただただ行く先を定めず、歌に縁りのある土地を目指してあてどない旅に出たが、その旅路の途中瘧を病み、床に伏すことに成ってしまった。しかし、未だ訪ねていない歌枕のことが気に掛かり、心穏やかでない。が、漸く昨日今日病が癒える様子が見え初め、早くも旅心が掻き立てられるのである。前出蕪村書簡に「にほやかにむらしげどうの漆して　かくの如く直りたき物に候。しかし此句にては、百里のとまり、と云句遠く相成り申す可く候。」と見え、当句は「にほやかに」の改案であることが分かる。続けて「六句目は執筆の句にいたし候て、うらうつりへよく取合ひ候様に、句を御作り替へ成され間じくや。」と認めている。更に蕪村は、「〇翁のすはぶき　〇浅間しく年ふりて　〇泊りわびしき　表六句の内、右のごとく打かさなり候故見ぐるしく候。右之内せめて一句直し候へば、耳立ち中さず候。是はぜひ案じかへ然る可く候。」と改作を強く要請した。

哥枕瘧落たるきのふけふ

初ウ二　山田の小田の早稲を刈比　　村

季語は、「早稲」で秋である。「山田」は、「穂にも出でぬ山田を守ると藤衣稲葉の露に濡れぬ日ぞなき」（古今・読人不知）などに見られるように歌語であり、特定の地名ではなく、山間の土地の意である。前句の「きのふけふ」に、夏から秋の頃までという時の経過を見定め、一句が醸し出すほっとした気分を移した付けである。「歌枕」を軽く受け、歌語「山田の小田」と応じ、付句の人物は病のために久しく農事を休まなければならなかった農夫を発想する。夏の頃から瘧の病に苦しみ続けて田に入ることが出来ず、その間ただ山間の小田をずっと見守ってきたが、漸く秋口になって病も癒えた。早くも山田には秋が訪れ、早稲を刈る頃となって漸く健康を取り戻し、出来秋の農事に間に合い、有難いことであると言う意であろう。

山田の小田の早稲を刈比

初ウ三　夕月に後れて渡る四十雀　　董

季語は、「夕月」で秋、初裏八句目の出所の月を引上げる。前句の季節の推移を、時刻の経過に取り成した付けである。即ち前句の「頃」は、打越に対しては時期、付句に対しては一日の時間と成る。四十雀は、群れになって行動する小鳥である。山間の村の夕暮れは早く、山の端近くに月が掛かりかけた夕暮れ迫る頃、農夫がせっせと早稲刈りに励む。一方四十雀にとっても稔りの秋は、豊富な餌に恵まれた最高の季節であり、日が西に沈みかけているのにも気付かず、夢中で稲穂を啄む。やがて四十雀の群れは、山の端に姿を現した夕月に気付き、夕月に後れまいと慌てて飛び立ち、月をかすめて山の塒に帰って行く。几董は、自著『付合てびき蔓』に「是は景気を延すといふ付也。」と説明している。和歌・絵画的秋の夕暮れの景だが、四十雀は俳諧である。

夕月に後れて渡る四十雀

初ウ四　秋をうれひてひとり戸に倚（ヨル）　　村

季語は秋。「秋をうれひて」は、「をしむとも涙に月も心からな

れぬる袖に秋を恨みて」（新古今・俊成女）のように秋の夕暮れの物寂しさ、古歌の詩情であるが、「秋思」という漢語にも通う。「戸に倚ル」という言葉は「倚門之望、倚門之愁」（戦国策）の例があるように、日本固有のものでなく、漢詩の世界である。蕪村の「春風馬堤ノ曲」に見られる「戸に倚る白髪の人弟を抱き我を　待春又春」も同じである。夕暮れ迫り山の端に月が現われ、四十雀の群が月に後れまいと山の塒に向かって飛んで行く。そうした月前の景を悄然として眺める体である。前句の景はあたかも一幅の墨絵であり、いわゆる文人画である。その景を眺める人は、漢詩人、或いはそれなりの素養のある女人と見るべきであろう。『付合てびき蔓』には、「是起情也。前句のけしきより人情を向はせて、情を起し来る。」とある。

秋をうれひてひとり戸に倚

初ウ五　目ふたいで苦き薬をすゝりける　　董

雑。前句の詩人を病人に取り成した付けである。「戸に倚ル」は、打越の場合詩人の姿態であったが、当句においては病に耐えて戸に寄り掛かる人の姿である。「目ふたいで」は、『源氏物語』「玉鬘」の巻に「御袖して御耳ふたぎ給ひつ。」とあるように古語で、目を閉じる意である。前句に病重き人を見定め、「良薬口に苦し」の諺により「苦き薬」と趣向する。秋になればこの病もあるいは癒えるかと願っていたが、季節の変わり目が却って良くなかったのか、願いに反して病は一層重くなり、戸に寄り掛かりながら秋出の病気を心配しつつ、目を閉じて苦い薬を飲むことである。病中の様子を直裁如実に言い立てたところが面白い。几董も自ら「前句、秋を愁ふるといふより、戸によるといふを、ぶら〳〵病ひの人と見て、趣向を立たものである。」（『付合てびき蔓』）と説明している。また蕪村は、几董へ「いろ〳〵ねり返し候ての事に候。是迄よく出来たる可仙に候故、くり返し案じ見申し候。末一段にて疵を付け候も残念に候。夕月におくれて　秋を愁て　目ふたぎて　此三つのて、いく度も吟じ見候に、かつて構ひ中さず候。やはり此ま、にて然る可く候。」（安永九年筆、月日未詳）と書状を認めている。

目ふたいで苦き薬をすゝりける

初ウ六　当麻へもどす風呂敷に文　　村

雑。「苦き薬」を受けて人和の売薬を想定し、当麻寺秘伝の妙薬を趣向した付句である。大和は、古来薬草に富んだ地として知られ、平安時代の延喜式には多くの薬種を大和から貢進した様子が記されている。また『大和売薬史』によれば、江戸時代中期、御所を中心として売薬業が栄え、薬仲間組合が結成されていたという。病気療養を続けている人の許に、風呂敷に包んで当麻寺の妙薬が届き、早速その薬を飲んで見ると強烈な苦味、つい目をつぶって一気に飲む。久しく苦しんでいた病に良く利くように思われ、早速礼状を認め、返却する風呂敷に添えた。中将姫の伝説で知られる古風な地名の詩的情趣により当麻を想起したという解が行なわれているが、この付合に中将姫伝説は関係がなく、大和の売薬による趣向と解すべきである。

当麻へもどす風呂敷に文

初ウ七　隣にてまだ声のする油うり　　董

雑。几董は、『付合てびき蔓』に「是、人情三句にわたる付也。前句は打こしの人の用也。其用を取て当麻へもどしたい物が有、誰や来よかしと、人待ツ用をうけて、後句に油うりと趣向を立て、一句の作は隣にてと、よその事を起して来たものじゃ。」と説明している。几董自らの句解に従えば、返礼を添えた風呂敷を油売りに依頼する体である。当麻へ戻す風呂敷を人に頼もうと伝を探していると、幸い先程の油売りがまだ隣で話し込んでおり、話し声が聞こえてきた。その油売りに風呂敷を託すべく急いで礼状を認めるのである。もとより馴染の油売りであり、近世期にはこのような行商の人が、便利屋の役割を果していた。当時の庶民の日常生活の一齣が偲ばれて楽しい。

隣にてまだ声のする油うり

初ウ八　三尺つもる雪のたそがれ　　村

季語は「雪」、冬である。前句の油売りの長談義を受けての句作趣向である。川柳に「油うり油はうれず油うる」（万句合）とあるように、話し込むことを油を売るとも言う。長談義の時間の長さを「三尺つもる雪」と具象化し、早くも黄昏に及ぶと付けたのである。即ち昼前にやって来た油売りが、夕方になっても未だ隣で話し込んでいる。朝から振り出した雪が、夕刻時分には三尺程に積もった。にも拘らず油売りは大雪の様子を知ってか知らずか、話しを切り上げて帰る様子がない。一体あの油売りは、これからどうするのであろう。この大雪ではとても帰ることが出来ないのではないか、などと頻りに気を揉む体である。天明振りの俳諧趣向、ほのぼのとしたユーモアを窺わせて心地よい。

三尺つもる雪のたそがれ

初ウ九　餌にうゆる狼うちにしのぶらん　　董

雑。前句から雪深い人里離れた辺境の地、狼などが棲むような土地柄を想定した付けである。「狼うち」は、猟師、鉄砲打ちのことであろう。久しく雪が降り続いて大雪になったため、腹を空かせた狼が、獲物を探して雪の中を彷徨い歩く。一方鉄砲打ちがそうした狼を狙って身を隠し、狼が現われるのを待つ。視界にあるものは満目の雪である。夕刻迫る時分、腹を空かせた一頭の狼が現われ、身を隠している鉄砲打ちに襲い掛からんと身を低めて腹這うように忍び寄る。今正に人と狼が相対し、壮絶な戦いが始まらんという場面である。薄暮に包まれた真っ白な雪上に、両者相対して生きるために生死を賭けて戦う緊迫感が漲る。蕪村たちの俳諧好尚の一端を窺わせる作品である。

餌にうゆる狼うちにしのぶらん

初ウ十　兎唇（イグチ）の妻のたゞ泣になく　　村

雑。兎唇とは、生まれ付き唇が縦にも割れていることで、三つ口とも言う。この付合いに就いて几董は、『付合てびき蔓』に「是前句は、三尺の雪といふに、餌に飢る獣と趣向を付て、日暮がたと見て、忍ぶらんと句作を結だものじゃ。次の句は前を狩人と見て、其妻を向はして、兎唇とした趣向は狩人へのよせ也。只泣になくと情を起したは、商売が殺生をする事ゆへ、我身も此やうなかたわかし

らぬ、扨も歎かはしい事じやと、ひとり留主をして泣てゐる体也。」と因果咄として趣向した旨を記している。しかし此の几董の説明は、「妻の兎唇を夫の殺生ゆえとする几董以来の見方は理屈に合わない。女房は嫁する以前、生れた時から兎唇なのである。」(『座の文芸蕪村連句』)と従来否定されてきた。だが父から自分へ、更に自分の子へという三代因果話しと解すれば、几董の説明に従うことに問題はない。即ち、私の父が狩人であったため自分は、此のような不具な身に生れ付いた。夫もまた狩人で殺生を重ねているが、生まれてくる子も、私のようになるのではないかと思うと悲しい。夫は妻の説得を聞こうともせず、殺生を重ねている。妻は、只泣きに泣くばかりである。世間でよく言われる「親の因果が子に報う。」に縋れる句作りであろう。

兎唇の妻のたゞ泣になく

初ウ十一　鐘鋳ある花のみでらに髪きりて　　董

季語は、「花」で春、花の定座である。兎唇に生まれ付いた若き妻が、今鐘鋳の行事が行われている花の盛りの山寺に参詣し、我が身の罪障に気付き、前世の因縁を恐れて発心し、髪を切って仏門に入ったもののなお俗世に未練が残り、只ひたすら泣くばかりであると言う意である。「花のみでら」の「花」にまだうら若い妻の意を含め、前句の「泣になく」は、この世への未練を断ち切れぬ心境を窺わせる。几董は、「打こしの人は夫ト也。前句の人は妻也。其妻の用を自にして附たものじや。扨一句の趣向は、いぐちといふ支離(カタワ)の女を見込て、うき世の中にもあき果て、我身の罪障消滅のため、鐘の供養に参りて、髪をおろして尼に成といふ意也。扨此句まへは花の定座にあたりて、是非とも花の句をせねばならぬ所也。然ども前句より情を起して来たれば、それをうけて附ねばわたりもあしく、附の手がらもない。やはり其人の情を附ねばならぬ。そこで鐘供養として、花をよせあはせたものじや。よつてむつかしい中にも、山寺などの花のけしきも、自然と余情にあらはれて、花の句になるやうに仕立たは、花の御寺といひつゞめた句作の所が大キな骨折ぞ。」(『付合てびき蔓』)と記している。

鐘鋳ある花のみでらに髪きりて

初ウ十二　春のゆく衛の西にかたぶく　　村

季語は、「春」である。前句は、春の一日のこと、鐘鋳の法要、剃髪の仏事もすっかり終り、やがてその日も静かに暮れようとしている。「西にかたぶく」は、太陽が西に沈もうとしているの意だが、西方浄土を言い含めた表現である。剃髪した人は男性、かつ何もかも人生に悟り得た者、恐らく五十過ぎの老境に入りし人であろう。付句に、この世における人としての成すべきことを全て終え、心に思い切りたる者の静けさがある。髪を切り、その日も暮れ、哀れ春も行くめりの心境である。ただし几董は、「鐘供養の花の寺に春の夕暮と、けしきにて附流したる逃句也。」(『付合てびき蔓』)と説明する。

春のゆく衛の西にかたぶく

名オ一　能登どの、弦音かすむ遠かたに　　村

雑。能登殿は、平家の武将で弓の名手能登守教経、平ノ教盛の次

男。前句に、亡びの気味を見定めての付けである。その亡びに、西海に散って行った平家の武将能登殿を付ける。春の季節も終ろうとする頃の夕暮時分、能登殿が放った弓矢は、弦音高く弓を離れ、夕靄に霞む西の空の彼方に、平家の西に落ち行く姿を象徴するかのように消えて行った。几董の「西に傾といふ句をとりて、西海に漂ひし平家の面影を附たものじや。春の行衛といふに、霞む遠かたと句を結びしが、前句の機嫌を合すといふものじや。(『付合てびき蔓』)と言ふ注記に、付合の妙は尽くされている。軍記物語の世界も、蕪村が求めた俳諧の主要な題材であった。

能登どの、弦音かすむ遠かたに

名オ二　博士ひそみて時を占ふ　　董

雑。前句を弓占いと見て、陰陽に通じる博士が弓の弦音で占いを解こうとする体を付ける。「時を占ふ」は、行事の日時の吉凶を占うのであろう。吉凶を占う弓占いが行われることになり、弓の名手能登殿が召し出され、能登殿が名誉の弓を放った。密かに控えていた博士が、弦音とともに遠く彼方に霞み消えて行った弓矢の行方を似って、日時の吉凶を占っている。能登殿を単なる武芸の士と見たい。もし平家と解するならば、打越に対してやや観音開きの弊に陥る。蕪村は、几董へ「能とゞの、あと博士の句、しかとつかまへたる付にては之無く候へども、どこやら付たる心地に候故、あとあんじ申す可く候。」(安永九年九月廿四日付、几董宛書簡)と書き送っている。弓占いなる行事は実際には無いが、王朝期に宮中で魔を払う行事として行なわれた鳴弦の儀による趣向であろう。鳴弦の儀そのものとも解せられるが、「時を占ふ」とあるので上記のように解して置く。

博士ひそみて時を占ふ

名オ三　粟負し馬倒れぬと鳥啼て　　村

雑。鳥語によって人の死を知り、そのことに困って却って殺人の疑いを受け投獄されたが、獄中で雀の言葉から城外で粟を積んだ牛が倒れた変事を知り、役人にそのことを告げ、鳥語を解することが判明し、疑いが晴れたという説話「公冶長」(『論語義疏』)に基づく付句である。すべて出典に寄り掛かった作で、作者の手柄は少ないが、場面を日本の王朝期の行事から中国の故事に転じ、蕪村の漢籍趣味を窺わせる。博士が、行事開催の日時吉凶を密かに占っている折りも折り、郊外で粟を負った馬が倒れていると鳴いている鳥の言葉を解し、そのことを確認させたところ事実であった。博士のその不可思議な能力に感心し、驚く体である。蕪村は、几董へ宛てた書簡に公冶長について、「是も孔門の人にて、論語に出たる賢者也。鳥の語によく通じたる人に候。雀の啼く音を聞て、そん所そこに米つみたる車のくつがへりたるにより、米がこぼれたほどに、いざや啄みに行こふと、雀どもが物がたり也と云はれける故、人うたがひて其所へ行て見たれば、はたして其言葉のごとしと也。不思議成る人也。」(安永九年筆、月日不詳)と説く。更に「能登殿の」以下三句について別案を示して意見を徴し、推敲を重ねた様子が記されている。

粟負し馬倒れぬと鳥啼て

名オ四　樗咲散る畷八町　　董

季語は、「樗咲く」で夏である。前句の、馬が倒れている辺りの景色を詠んだ景気の付けで、暫く続いた人事の句を避けた遣り句であろう。「畷」は畦道、「八町」はその道が遥か彼方まで続いている広大な田園風景を言う。爽やかな夏の好天の下、粟の刈取りが行われ、粟を背負わせすぎたのであろう、樗の花が咲き散る遥かに続く並木の畦道で、粟を背負った馬が倒れてしまった。その辺りで小鳥が、「馬が倒れた」と言わんばかりに頻りと鳴き騒いでいる。広大な田野の中で、農民が農事に励み、突然起きた珍事に鳥が騒ぐ景である。

樗咲散る畷八町

名オ五　立あへぬ虹に浅間のうちけぶり　　村

雑。前句の近景に遠景を付ける。樗の花が咲き散る畦道に立ち、遠く見遥かした景である。「樗咲散る」から雨上りの景を趣向。即ち俄雨によって今を盛りと咲く樗の花が散りかゝり、その雨上りの直後、虹が立つ眺めである。前句の「咲散る」という微妙な表現を巧みに受けた付けである。「立あへぬ」は、未だ虹がはっきりとは立っていない、つまり丁度今虹が立ち初めたの意で、雨の直後の景を言う。「うちけぶり」は、噴煙立ち昇る浅間山が雨上りの霧に霞んで見える様子を言うのであろう。「畷八町」を、畦道が足下から遥か彼方へと続く眺望が利く地形と解し、その眺めを裾野が広がる浅間の地と見定めたのである。遠く続く畦道に沿って植えられている樗並木の花が、突然の俄雨で散りかけ、その雨上り、遥か彼方の浅間山の方に目を遣ると、山頂には噴煙がけぶり、その辺りに僅かに虹が立ち掛けて見える。蕪村の見事な風景美の句作りである。

立あへぬ虹に浅間のうちけぶり

名オ六　勅使の御宿申うれしさ　　董

雑。勅使は、朝廷から地方へ勅命を伝える使者のことである。地方の名士にとって朝廷からの使者を御泊め申すことは、最高の名誉であった。前句の雨上りの晴やかな気分を受けて、名誉のお宿を申し受けることになった人の嬉しくも晴れがましい心境を趣向する。場所は、中仙道の浅間山が見える街道筋であろう。朝廷の命を受けて東に下る勅使を、お泊めするようにとのお上から御達しがあった。勅使の宿を指定された家の主人にとって、大変名誉なことである。そのような折り遠く雨上りの浅間山を眺めやると、山頂からは噴煙が立ち昇り、虹も立ちかかり、いつになく爽やかな気分に包まれる。御達しのことを思うにつけ、一世一代の喜びが込み上げてきて、爽快さが増すことである。

勅使の御宿申うれしさ

名オ七　江に獲たる簀(アヂカ)の魚の腹赤き　　村

雑。「江」は「コウ」でなく「エ」と読む。「簀」は「アジカ」と訓み、竹・葦などで編んだ篭のことで、古典的趣を添える。前句の「勅使」から王朝期に行われた「腹赤の奏」を想起しての付けであろう。「腹赤の奏」は、毎年正月の節会に、筑紫の国の太宰府から腹赤という魚を宮中に献上する行事である。勅使の供御の膳に魚を上ぼせようと江に簀を入れて引き上げたところ、偶々腹赤が上

がった。勅使の御宿を申し受けただけでも喜びであるのに、これまた更に幸運が重なり禧く、勅使の饗応に打って付けの魚であり、嬉しい限りである。前句の「うれしさ」を敷衍した付けである。

江に獲たる簀の魚の腹赤き

名オ八　日はさしながら又あられ降　　董

季語は、「あられ」で冬である。前句の珍事を不思議なこと、異常なことと捉え、異常な天候を以って応じ、定まらぬ冬空の様子を趣向する。日頃から川に入りよく魚を捕っているのだが、今日はいつもと異なり不思議なことに簀に腹の赤い魚が上がり、空からは突然霰が降って来た。霰が止んで日が急に差したかと思うと又霰が降って来る。何とも奇妙な天気だ。別解に薄日の中を降る白い霰は、腹赤き生魚の鮮烈な色彩と映発して美しいという解釈(『座の文芸蕪村連句』)があるが、作者の作意は、そうした色彩に視点を置いたのではなく、珍事に大候の異常さを以って応じたものと考えたい。

日はさしながら又あられ降

名オ九　見し恋の児ねり出よ堂供養　　村

雑。前句に時間の経過を見定め、寺を訪れ一日中立ち詰めで堂供養を見物する体を趣向し、練り行列の稚児を長らく待ち焦がれる人の心境を付ける。「見し恋」は、片思いながら以前より思いを寄せていたという意である。御堂の落慶法要が営まれ、その練り供養に稚児行列が行われることになった。男には以前より思いを寄せていた可愛い子がおり、今日その子が着飾って稚児行列に加わり、姿を見せるはずである。男はその子の晴れ姿を見ようと楽しみに早くから待っているのだが、日が差しながら時折繰り返し霰が降って来るという不安定な空模様のため、なかなか行列が始まらない。男は早く練り出でよと祈る思いで、お目当ての稚児を待ち兼ねている。「ねり出よ」の語は、待ち侘びる心情が込められた表現である。

見し恋の児ねり出よ堂供養

名オ十　つぶりにさはる人にくき也　　董

雑。几董は、句意について(『付合てびき蔓』)に、「是前句の児待人を女にして、髪などもりつぱにこしらへ立て出たる姿を趣向にし、扨頭にさはる人といふは、堂供養などの場の群集して、我がちに物見たけき中なれば、人の髪にさはるも何もおもはぬ体をあしらひ、扨女の情として、髪に障る事を全て嫌へるおもむきを、一句に作したものじや。人憎き也と、かるういひはなしてあれど、情は甚深き句也。」と自解している。即ち思いを寄せているお目当ての稚児を見ようとする少女が、美しく髪を結い、着飾って稚児行列の見物に出掛けたが、大変な人込みである。押し合いへし合いの状況で、その混乱に紛れてきちんと結い上げた髪に触れられた少女が、折角整えた髪が崩れるのではないかと気遣い、「まあ、憎らしい人。」と嫌な思いをする体である。

つぶりにさはる人にくき也

名オ十一　十六夜の暗きひまさへ世のいそぎ　　村

季語は、「十六夜」で秋、月の定座である。「世間では、何故かく物事を取り急ぐのか」という頭に障られた人の感慨を付ける。前句の「つぶりにさはる」から暗い場所を想い、更に先を急ぐ街道筋

の人々の忙しい暮し向きの様子に思いを廻らした句作りである。日が西に沈み辺りは暗くなったが、十六夜の月が間も無く上ってくる僅かな短い時間でさえ、人々は月の出を待つことをせず暗闇の街道を急ぐあまり、通りすがりに闇に紛れて頭に触れ合って行くとは、全く嫌なことだ。今しばし月が出るまで待てばいいのに、何てことだ。本付合の付け筋は、几董が、『付合てびき蔓』に、「此附かたはよく味うて見るがよい。打こしの句は、児ねり出よといふにて、只心に物待してゐるのみ也。それに、つぶりにさはる人と、附に一句の趣向を立たれば、其人に向はして、暗きひまさへ世のいそぎと、くらがりにて髪に行当りし休をあらはした物じや。世のいそぎといふにて、三句の輪廻をのがるゝ也。世の字が大事で有。是前句の情を押し出すと日附にして、又時分をさだめて転じたる也。」と説くところに尽きる。

十六夜の暗きひまさへ世のいそぎ

名オ十一　しころ打なる番場松本　　董

季語は、「しころ打」で秋である。「しころ打」は、衣を槌で打つこと、砧のことだが、砧は雅の世界、しころは俗、俳諧である。月前に砧を打つは、和歌伝統の詩情である。心せわしく砧を打つ様子を世の急ぎと見た趣向であろう。『付合てびき蔓』に、「番場・松本は大津とぜゞの際也。附はいざよひの闇に世のいそぎといふをとがめて、暮砧急（ボチンイソガハシ）などのおもかげにて、碪を附物とさだめたる会尺也。」とある。即ち番場と松本は、大津と膳所の間にある小一時間ほどの極めて短い距離にある宿場であり、前句に詠まれた月が昇って来るまでの僅かな短い時間を距離に取り成した趣向で、「地名のもつさびた音調が、せわしげな砧の音によくマッチしているところに着目し」（『座の文芸蕪村の連句』）ているという解は当たらない。なお杜甫の「秋興ノ詩」の中の「寒衣処処刀尺を催し、白帝城高うして暮砧急（ポチンイソガ）はし」（『唐詩選』）に依る句作りと言われている。月の出を待たずに心せわしく砧を打つ様を、世の急ぎと見たのである。心せわしく砧を打つ音が聞こえてくる。そうした中を世間の人々はなぜ急ぐのか、番場から松本という小一時間ほどの僅かな短い距離でさえ、間も無く昇る十六夜の月を待たずに、少しの時間も惜しんで暗闇の街道を急ぎ行くことだ。

しころ打なる番場松本

名ウ一　駕舁の棒組足らぬ秋の雨　　董

季語は秋の雨である。「しころ打」で時刻は宵の時分、うらぶれた宿場の景である。前句に秋の寂寥感があり、その侘しさを見定めて棒組足らぬと趣向する。が、駕舁が揃わないのは鄙びた土地柄故のみでなく、番場と松本の間は距離が短く、普段は駕舁など余り利用しないためでもあり、突然の雨で駕舁を求めても、急には駕舁の相手が揃わないのである。しかも「棒組足らぬ」には、棒組のみに留まらず、何かに付け欠けがちの宿場の侘しい様も思われる。秋の雨は、これに打ち添えた景である。滑稽さが漂い、蕪村は几董に「しころうつ番場松本、駕かきの棒組足らぬ、おかしく候。其外もよろしく候故、とくと相考へあと付け早々遣し申す可く候。」（安永九年十一月一日付）と報じている。几董は、「前句の場を見さだめて、

駕舁と趣向し、棒組足らぬは前句の移をとりての句作じや。秋の雨は季節のあしらひにして、二句のよそほひ也。」(『付合てびき蔓』)と説明している。

駕舁の棒組足らぬ秋の雨

名ウ二　鳶も鴉もあちらむき居る　　村

雑。前句のものの整わない様を、ちぐはぐさで応じる。「あちらむき居る」の表現に俳意があり、秋の侘しさが強調される。突然の雨で久し振りに客が付き、駕舁が急いで相棒を探すのだが、相手は何処に行ったのか辺りに居ない。ふと木の上を見ると、「俺らは知らねいよ」と言わんばかりに、鳶も鴉も素知らぬ振りをしてあちら向きに止まっている。駕舁にとっては、「冷てい奴だ」と言いたい心境である。『付合てびき蔓』に「爰では秋雨といふ天象に、生類をあしらふて逃る也。然ども、あちら向せて置が一句の趣向也。」と、「あちらむき」に俳意を込めた旨が説かれている。蕪村には、「あちらむきに鳴も立たり秋の暮」(蕪村句集)という句がある。

鳶も鴉もあちらむき居る

名ウ三　崇(タヽリ)なす田中の小社神さびて　　董

雑。前句の鳶・鴉は木の梢に止まっている様子、その梢は、田中の小さな社のある森の木である。その小社は、崇りがあるとして常々村人に恐れられており、子供にも近付かないように言い聞かせて居るのだが、鳶や鴉はそんな崇りなど人間のこと、自分たちには関係がないとばかりに杜の梢にあちら向きに止まって居る。前句の「あちらむき居る」を自分たちには関わりがないという様子に解し、その関わりを「崇り」と発想して、崇りに関わらぬ鳥、崇りを被る人の二つを取り合わせた趣向である。初案は中七が「鎮守」(『もゝすもゝ』初刷本)であったが、鎮守では村人に親しまれ、「崇なす」に合わず、「小社」と推敲したのである。

崇なす田中の小社神さびて

名ウ四　既玄番が公事も負色　　村

雑。田中に対して玄番と発想した点に注意すべきであろう。玄番は、元来玄番寮の官名だが、この句においては由緒ありげな家柄の人の通り名として用いられ、在郷の名家、いわゆる郷士、郷侍と言った身分の人である。その領する土地の中には、神さびた小社が祀られてある。「神さびて」は、連綿と続いてきた家の歴史、その古さを窺わせる。近頃その所有地について土地争いが生じ、裁判沙汰となったが、日頃から主が神祀りを疎かにしていたため、終に神の崇りを受けて敗色濃厚と成ってしまった。「崇なす」から土地争い、訴訟事件を発想し、「負色」と応じた趣向である。

既玄番が公事も負色

名ウ五　花にうとき身に旅篭屋の飯と汁　　、

季語は「花」で春、花の定座である。前句より公事宿における玄番の身の上、心情を付ける。「花にうとき身」は、花には関心がない、無風流者と言うべき人柄の意である。旅篭屋は、公事宿のこと、「飯と汁」は、一汁一飯、食事も粗食であると言う。世間は春爛漫の季節を迎え、人々は真っ盛りの桜の花に浮かれているというのに、花見どころではない此身の上、土地争いも敗色濃厚であり、寂しく

恥じ入る思いで公事宿の粗末な膳に向かう。風雅に関心がなく、世間の人情をも解することが出来ない人柄故、裁判沙汰を起こし、敗色濃厚になったと見る。

花にうとき身に旅籠屋の飯と汁

挙句　まだ暮やらぬ春のともし火　　菫

季語は、「春」である。前句の「花にうとき」「飯と汁」から武骨者、俗物、無風流者といった人物が連想され、そうした人物を設定する。その人は、商用などの旅の人であろう。「まだ暮やらぬ」とは暮れなずむ頃、つまり未だ花を楽しむことが出来る時間が充分にあるの意である。春の日は暮れようとしてなかなか暮れず、道中寄り道して夕暮迫る頃の趣き深い花を楽しむ時間が十分にあるのに、無風流者故花見には無関心で、早々と宿に入って灯火を付けさせ、飯だ汁だと言って飯に食い付くのである。挙句の式方に従い、春の花の季節をもって穏やかに仕上げているが、敢えて花より団子流の無風者を詠み、蕪村一派の俳諧句作りにおける興がる姿勢を窺うことが出来る。